

救いと未来への希望を表す壁画
(兵庫県姫路市の井野病院で)



美術の方で病院を癒しの空間に——。兵庫県姫路市の井野病院に、京都造形芸術大学の学生、大学院生、卒業生が大規模な壁画を描いた。

兵庫・姫路の病院

欧米の医療施設で美術を生かした環境作りを見てきた井野節子事務局長が、「大きな癒しの空間を作りたい」と、同大学の小林昌廣助教授（芸術生理学）に持ち掛けた。

一階から五階までの南北の階段に沿った壁面が制作場所

手帳

に選ばれた。空間表現への考え方の違いもあって、十六人が日本画、洋画班に分かれて制作。約一か月で完成した。

北階段を受け持った日本画班は「みんなの気」という統一テーマを設定。「階から順に黄—緑—赤—青と移り変わる色彩基調を定めた。

患者の心癒す 大規模壁画を制作

出来上がったのは、「風景の積み重ねによる抽象的な世界」（小林助教授）。階段を上る人は、枝が渦巻き状の樫木、キキヨウやアサガオ、跳び上がるカエル、ハスに座した観音菩薩などを目にし、深い樹に包まれた最上階に達する。みずみずしい生命感や救いのイメージが伝わってくる。

洋画班の南階段は、一本の巨木が全体を覆く構図。根っこの辺りで動物が遊ぶ。カラフルな風車の家が並び、噴水広場がある。木の上空を小鳥たちが舞い、クジラが泳ぐ。

リハビリ運動の場でもある階段を、患者たちが喜んで利用するようになった。「絵をかくことで、白い壁を圧迫感のない空気のような存在に変える」という狙いが、かなりの程度達成された。「経起が悪いのでは」との感見も一部にあった観音菩薩も、「安らぎを感じる」と肯定的に受け入れられた。

井野事務局長は「階段が歩いてみたい空間になった」。小林助教授は「癒しとは本来、だれかがだれかを治すというより、もっと主体的なもの。壁画がきっかけで、患者さんや職員の意識が、よりよい方向へと変わっていく雰囲気できれば」と言う。

病院は治療を施すだけでなく、入院患者にとって心地よい生活の場として機能し、外来患者や見舞客にも安心感を与える場所であって欲しい。今回の試みは、美術をそれに活用した先駆的な例として、影響を及ぼしそうだ。